



校長通信

令和3年度11号 令和3年9月28日

和歌山市立河北中学校 校長 戸川定昭

2学期が始まり、約1カ月が経ちました。中間テストを終え、授業のテスト返却で、生徒たちは、自分の答案用紙を見て、一喜一憂していました。

生徒には、いつもよく言っているのですが、テストの結果だけに囚われるのではなく、どこの分野の、どの内容の理解が不十分だったのか、しっかり見直して、次に活かしてほしいと思います。

《学校はすべての「人」が学ぶところ》

9月6日から、4名の教育実習生が本校で、生徒と実際に触れあいながら、教科指導等について経験しながら学んでいます。教科の内訳は、国語科1名、数学科1名、英語科2名です。英語科実習生の実習期間は、9月24日までの3週間で、22日、実習で学んだ成果を確認する研究授業を、それぞれ実施しました。

内容は、1年生対象で、英語で過去のことを表現する際に使う語法（動詞の過去形）を学び、それを使って、実際に、昨日何をしたか、夏休みに何をしたか、そして、その時、どう思ったか、感じたか等、伝え合う活動を行いました。

過去のことをイメージさせるのに、一人の実習生は、自分が河北中学校の生徒だった時の写真を提示したり、もう一人の実習生は、アメリカでの生活が長い強みを生かし、流ちょうな英語を駆使しながら、授業を進めていました。それぞれの個性を發揮しながら、どちらの授業も子供たちは、一生懸命、動詞の過去形を使って、英語で対話をしていました。

本校の英語科担当教員が、実習生の指導をした成果もあり、実習生は、無事、研究授業を終えることができました。改善の余地がいくつかありましたが、それらをカバーする、実習生の前向きな姿勢が良かったと思います。生徒に英語を好きになってもらおう、生徒が、積極的に英語を使うことができるようにしようと、一生懸命に指導している実習生の姿が印象的でした。私自身も学ぶ点が多々あったように思います。

「すべての子どもの学習権を保障する」という理念のもと、教職員や地域の人たちの協力で設立された大阪市立大空小学校の初代校長、木村泰子先生の「学校はすべての人が学ぶところ」という言葉を思い起こしました。

